

翻訳

A. A. ミルン 『名誉ある平和』 〈3〉

A. A. Milne *Peace with Honour* (3)

著：A. A. ミルン

A. A. Milne

訳：吉村 圭

Translation: Kei Yoshimura

鹿児島女子短期大学

Keywords : A. A. Milne, Pacifism, First World War, English Literature

キーワード : A. A. ミルン, 平和主義, 第一次世界大戦, 英文学

[訳者解題]

本稿では、A. A. ミルン (Alan Alexander Milne) が1934年に著した平和に関する論考『名誉ある平和』(*Peace with Honour*) の9章から11章の翻訳を行う。¹

9章では戦争支持者たちが戦争を自らの死と結び付けて考えず、思考停止状態で「戦争の習慣への追従」(subservience to the war convention) (89) をしていることに対して、10章では第一次大戦を経験せず悠々と生き延びたものたちが、経験したことのない戦争について勇ましく雄弁に語ることに對して、11章では当時戦争の口実として用いられた「人間の本性」(Human Nature) という言説が持つ矛盾に対して、それぞれに批判が行われている。

中でも9章では、ミルンが著した掌編「アルマゲドン」(“Armageddon”) と同じ言い回しや描写が随所で用いられており、その点が極めて意義深いものといえる。「アルマゲドン」とは、1914年8月5日号の「パンチ」誌に掲載された物語であり、日付を見てわかるようにその号は、イギリスがドイツへ宣戦布告し、事実上の大戦への参戦を表明した8月4日の翌日に発行されている。執筆期間を思えば、まさに大戦前夜に書かれた作品なのである。その中では第一次大戦が勃発するまでの経緯が極めて風刺的に描かれている。²

物語の冒頭では、ポーキンスというキャラクターが「英国に必要なものは戦争だ [...]。俺たちはたるみきっているよ [...]。俺たちを目覚めさせるためには、戦争が必要なんだ」(what England wants is a war [...]. We're flabby [...]. We want a war to brace us up) (87) と述べ、戦争のない現状を嘆く場面がある。これとほぼ同じ言説が『名誉ある平和』9章に用いられている——「英国はたるんでいるよ。目覚めるためには戦争が必要だ」(England is

getting slack. What she needs is a war to wake her up) (88)。同箇所での発言は1914年の初夏にある愛国主義者が語るのを実際に聞いたものだと言われている。つまりまさにミルンが「アルマゲドン」が書かれた頃に耳にしたものであり、その言葉は20年後に『名誉ある平和』が執筆されるまで、ミルンの心に残るほどの衝撃があったことが分かる。

また同じく9章では、戦争の暗雲がたちこめるときに、ある国の「旗」(flag) が冒瀆され、その「威信」(prestige) が脅威にさらされ、「編集長と新聞社長が扇動的な記事を書き始める」(Here are our editors and newspaper proprietors preparing their leading articles) のだと説明されている(87)。一方「アルマゲドン」の中では、エッセンランドという架空の国の「愛する国旗」(our beloved flag) への「侮辱行為」(insult) によって、その国の「威信」(prestige) が脅かされ、論説記者が愛国心を煽る扇動的な記事を書くというストーリーが描かれている(88)。単語や筋書きレベルでの類似はもちろんそうであるが、国旗が侮辱されたからという理由で扇動的に愛国心があおられ、国の「威信」を守るためという口実で戦うことが美化された上で戦争が始まるというこの作品に描かれた戦争勃発への過程は、『名誉ある平和』で言われる「戦争への習慣」そのものであるといえる。つまり大戦が勃発したまさにそのときに執筆された「アルマゲドン」には、『名誉ある平和』の土台ともいべきミルンの戦争への考えがすでに映し出されているのである。

ミルンは自伝の中で、「私は1914年より前も平和主義者だった」(I was pacifist before 1914) と述べているが(*It's Too Late Now* 211)、「アルマゲドン」と『名誉ある平和』の類似から、この言葉に偽りはなかったことがわかる。し

かし伝記的事実が示すように、そのミルンでさえも「戦争を終わらせるための戦争」(war to end war) という言葉を真に受けて、自ら戦場に身を投げざるをえなかったのである (*It's Too Late Now* 211). その事実から、第一次大戦という現在の我々には想像しえない歴史的事件に際して、戦争への社会的ムードの高まりをうかがい知ることができる。

ここで扱うミルンの『名誉ある平和』は、文学研究上これまで十分に議論されてきたとはいいがたいが、第一次大戦という時代に生きた人の精神の歴史を示す貴重な資料となるものであるといえる。そのためここにその一部の翻訳

を掲載する。

【解題注記】

- 1 本稿での翻訳及び引用はすべて『名誉ある平和』の初版 (Methuen, 1934) より行い、引用のページ番号もそれに準拠する。『名誉ある平和』の概要については拙訳『名誉ある平和 (1)』内「訳者解題」参照。
- 2 「アルマゲドン」に描かれた大戦勃発への風刺については拙著「第一次大戦のカリカチュアとしての『アルマゲドン』」にて詳細に議論している。

[本文]

名誉ある平和

9章 1千万人——と40名 (Ten Million - and Forty)

1

前章は幕間の休憩時間とでも捉えられたに違いない。⁽¹⁾そして宗教を女性や子ども、そして自身の最後の瞬間においてのみ必要なものと考えているような多くの人たちは、実際に読み飛ばしたことだろう。しかし召集令状は「王と国家」の名で出され、その国王がインド帝国の皇帝であるばかりか、信仰の守護者でもあるため⁽²⁾、人は自分たちが(恐らくは)守っているものが何なのかを問う権利を持ったのだ。しかし政治家が主題となるこの章においては、そのようにキリスト教が押し入るだけの抜け穴を見つけ出すことはないだろう。

もしすべての国家によって作られ、施行された法があったとして、その中で、戦争勃発と同時に関係国の首相と外務大臣が直ちに絞首刑になると規定されているとしたら、ヨーロッパに戦争など起きることはないだろう。これは議院内閣制が今日よりも上流のものたちによって仕切られた時代に発された言葉だ。しかしここで、この言葉を現代の状況に合わせ、拡大してみよう。もしある特定の地位の人たちが、ヨーロッパに先の戦争と同じ規模の大戦が起きたとしたら、自分がその最初の犠牲者になると確信していると仮定してみよう。何が起きるだろうか？

第一に、我々は犠牲者を選ばなければならない。そしてその目的で、議論を最も深く関連しそうな4つの大国に絞るとしよう。つまり、英国、フランス、ドイツ、イタリアだ。イタリアからはムッソリーニにご出席いただく。ドイツからはヒトラーとゲーリングとゲッベルス。民主国家の英国は幅広い選択肢が与えられているが、以下に候補を上げよう——

ラムジー・マクドナルド、ボールドウィン、サイモン。

開戦の日にくじで選ばれた無名の大尉。陸軍、海軍、空軍それぞれの最高責任者。ウィンストン・チャーチル。無名の大將2名、提督2名、軍需品会社の重役2名、彼らもくじで決めよう。ビーバーブルック卿とロザミア卿。そしてタイムズ紙とモーニング・ポスト紙の編集長。

フランスの政治はより流動的であるので、あらかじめ名前を指定しておくのは都合がよくないだろう。そのためここでは単純に、フランスには英国と同様の犠牲者に名乗り出ていただくこととしておこう。

これで次の戦争が起きたときに真っ先に死ぬことになる40名の人々が選ばれた。これで次の戦争が生じる可能性は減じただろうか。

老政治家がこのように言うのが聞こえる——「その仮定の話は、現実の政治の領域とは完全に異なるものだ。そのためそこから導き出された結論は完全に理論上のものに過ぎず、それゆえに価値のないものだ。」理論上のものではあるが、価値がないとは思われない。価値がないどころか、我々が戦争の伝統を理解する上では最大の価値がある。そのため私はあなた方読者に、究極の想像力の鍛錬でもって、しばらくの間先に述べた私の仮定が現実のものであるという振りをしていただきたいのだ。もちろん私も、多くの人にとって明らかにありえないことを想像することが難しいと分かっている。もちろんこの章の目的のために、戦争で一般の男たちが死ぬのと同様に、あるものは幸運にも死の苦しみを感ぜないほど瞬時に、またあるものは悶え苦しみながら、戦争が勃発したと同時にこれら40名の重要人物たちが一斉に死ぬべきというのはいかなる話である。しかし彼らが平和に対して献身すべきだということであれば、まったくもってありえないということはないだろう。彼らが自身の確かな死を認識することで戦争が不必要に続

くことを避けられると信じ、戦争の勃発に対し死をもって責任を果たすという崇高なる誓いをたて、そして（これが何よりありえないことなのだが、あくまでも想像しうることとして）彼らが戦争の勃発と同時にその誓いを果たすということであれば、そうであれば、我々の仮定は想像力の範疇のものとなるだろう。そのため、これらの40名の指導者たちが次の戦争の最初の犠牲者であると自信を持って仮定し、そうなった場合にヨーロッパの平和がより確かなものとなりうるかを自身に問うてみていただきたい。

何か疑問があるだろうか？ この40名が現在の影響力をふるう限りにおいて、彼らの国同士の戦争はもはや「現実の政治の領域とは完全に異なるもの」となることを私は確信している。

ここで、これが現実にそうなったと仮定しよう。そして仮にこの40名の指導者たちがいかなる状況下においても自身に死を宣告することがなかったとしたら、そのとき戦争の伝統は、我々の多くがそうだと信じてきた通り、ばかげたペテン行為であると露呈することになるだろう。というのも戦争の伝統とは、これまではこう言われてきたのだ——戦争とは「生物学的に必要な行為」、「人間の本質というものを示すうえで避けがたい行為」、「愛国心の究極の形での表現手段」（これ以上ない信仰だ）、「国家に刻まれた崇高さの刻印」、そしてその戦争が与えるものは（先の戦争では1千万もの）「甘美にして望ましい」死なのだ。簡単に言うと、戦争とは国々のいさかいを調停する上で唯一の、避けがたい、最も優れた手段であるということなのだ。しかし、これらの指導者たちが、1千万という死者に比してとるにたらないわずか40の自分たちの甘美にして望ましい死によって、感情の表出を思いとどまるというのであれば、彼らがこれらの言説を真剣に取り合っていることはありえない。戦争は避けられないものなのだろうか。だとすれば、彼らにはそれを避ける術はないだろう。戦争とは人間の本質なのだろうか。しかし彼らもまた人間の衝動の対象なのだ。戦争は愛国心の究極の形での表現手段なのだろうか。だとしたら彼らほど愛国的なものたちがいるだろうか。そして、もし彼らが（私がそうするだろうと考えるように）自分たちならば戦争の脅威さえ避けられると示していたならば、もし彼らが（私がそうするだろうと考えるように）愛国主義と平和は友好関係にあり、敵同士ではないと断言したならば、そしてもし彼らが自身の命を守るために、（私がそうするだろうと考えるように）1千万の他の人々が勇敢に祖国のために死ぬことを止めさせたならば、そのとき、彼らは（彼らがこれまで普及させてきた）あの戦争の習慣として用いられてきた論理にうそをつくこととなる。というのも、戦争はその犠牲者1千万人に40人が加わったからといって、人間の本質からはずれることも、不

可避ではなくなることも、崇高さが失われることもないからだ。

ということは、戦争を作り出すものたちが最初の犠牲者となると信じることは、戦争におけるあらゆる信仰を打ち砕くものとなるのだ。そうすることは、この本の著者と同じくらい確信した平和主義者として自身を宣言することに他ならないのだ。もし我々の支配者たちが、自分たちの命が危機にさらされているからといって、（愛国主義の神聖なる灯りをかげらせることなく）我々から戦争を遠ざけるのならば、彼らは今この瞬間にも同じことができるはずだ。彼らはいつだって我々から戦争を遠ざけることができるのだ。そうなれば、千年王国は我々の手の届くところに到来することとなるのだ。⁽³⁾

しかし愛国主義者はこの本の著者と同じほど確信した平和主義者ではないのだ。それゆえその愛国主義者は腹を立てながら、それらの重要人物たちが最初の犠牲者となったからといって戦争がなくなるとはこれっぽっちも信じられないと主張するのだ。そんなことは何も変化を生みはしない（と彼は誓う）。ウィンストン・チャーチル氏は（言いながら彼は脱帽し敬意を示す）最後通牒が出されたときには過去最大の興奮を感じることだろう。それはペルティナクスの愛国者たちと同程度に燃え上がることだろう。ゲーリングとムッソリーニは祖国のために死すことを激賞し続けるだろう。将軍たちや軍需工場の重役、新聞社の所有者は以前と同様熱心に戦争の準備を始めるだろう。実際に、今と同じように世界は回り、そして今と同じように、次の破滅（Armageddon）までの距離もまた近づくことも遠ざかることもないのだ。

愛国主義者はこのように言うのだろう。そして彼は自身を否定しないためには、そう誓うしかないのだ。

しかし——彼は理解しているだろうか？

彼に考えてもらおう…何度も、何度も考えてもらおう。そして彼に本当に考えてもらう機会となるのであれば、彼には先に述べた40名にもう一人犠牲者を加えることを想像してもらおう。つまり、彼自身だ。

こうして、41名が戦争の火ぶたが切られると同時に死ぬこととなり、次の戦争の影はヨーロッパを包んでいる。そのときこの41名は何をするだろうか。何を思うだろうか。

ムッソリーニとヒトラーとジョン・サイモンとフランスの代表者が一同に介したとして、ムッソリーニにとって戦争は栄光だろうか。ドイツの栄光というのはそれほど確かに、戦場にあるだろうか。「予防戦争」はフランスにとってそれほど大事なことだろうか。（あと何年も生き延びられないほどに、そんなに早急に必要なのだろうか。）英国の栄光とは女性と子どもが死傷することとそんなに密接に繋がっているのだろうか。一度まっとうになって考えよ

う。一度落ち着いて話をしよう。我々は戦争の習慣の奴隷ではないのか。確かに我々は理性のある人間だ。勇敢であり、そして確かに、愛国心を持っている。自分たちの命を犠牲にする準備だってできているのだ。しかし、我々は何のために死のうとしているのだろうか。他者を守るため——我々の死によって、1千万の人々に死を運命づけるときだろうか。文明のため。死すことで、我々は文明に破滅をもたらすのだろうか…。

戦争の雲が広がっている。誰かがほかの国の旗を冒瀆している。誰かの威信が脅かされている。いつか誰かの安全が脅かされるかもしれない。そんなとき編集長と新聞社の所有者が扇動的な記事を書き始めるのだ。

彼らはなんと攻撃的で、愛国的で、獐猛なのだろうか。戦争が訪れたときにそれに積極的に関わる以外に安全はないということについて、ビーバーブルック卿とロザミア卿はどちらでもいいというのだろうか。政府は公共的努力ではないものを通して沈むのだ。政府は彼らの支持者ではないものとともに上昇するのだ。彼らは終わるのだ…。

ウィンストン・チャーチル氏のお出ました。彼ほど恐れ知らずのものも、彼ほど英雄的に英国のために死ぬ準備ができていないものもない。しかし彼も第一には英雄的に生きたいと願うだろう。そして戦争が生じたら、彼は寄り添えない望みを導きたいと願うだろう…。その望みとは、また別の寄り添えない望みへと、彼を解放してくれるものなのだ。彼は誰のためにでも、そして何のためにでも栄光に満ちて死ぬだろう。いや、栄光に満ちたものでなくてもだ(彼が立てた誓いによって、彼は個人的に首を吊ることになるのだ)。しかし、彼は本当にそうするだろうか。死は恐れるものではないが、不可能性を伴っている。例えば、死者は首相になれないのだ。彼は自身の祖国への義務のための戦争への愛好を犠牲にすべきではないのではないだろうか。彼はトゥウィッカムで、「危機」への偉大なる演説を用意している。それはどれほど好戦的なものになるだろうか。

そして愛国主義者のお出ました。彼は何を考えているだろうか。1914年の初夏、私は彼が(とうに兵役の年は過ぎていたが) こういうのを聞いた。「英国はたるんでいるよ。目覚めるためには戦争が必要だ。」そして実際にそうだった。彼は同じことをいまも言えるのだろうか。愛国主義者にとって、戦争のない世界とはそれほど軽蔑すべきものなのだろうか。「モーニング・ポスト」紙を開いて、政府と編集者が「強硬な処置を取る」という記事を彼は喜んで読むのだろうか。青酸塩のピンを取り出して、「よしあと何日かしたらコレを飲んで死ぬぞ」と思うのだろうか。彼はなんと戦闘的なのだろうか。

そのため私はもう一度彼に聞きたい。彼は本当に自分の

死が戦争を志向する気持ちに何の影響しないのか。彼は、最後通牒が一時間も遅らされることはなく、たった一言の過激な言葉によって、行き詰まりが解消されるのだと信じているのだろうか。というのももしそれが多少なりとも違いを生み出すのだとしたら、これまで愛国主義者たちが言ってきたことが間違いであったと認めることになるのだ。

2

これでこの本全体のテーマは明らかになったと思うが、平和への妨げとなるものは、戦争の習慣への追従なのだ。ここでいくつかの別の形でのその習慣について考えてみて、それがいかに人を思考停止しているかを理解しよう。この章を書いているのは3月だが⁽⁴⁾、新聞のある記事が1つの例を与えてくれている。

毎年大学のボートレースの競技大会が行われている。レースの約6週間前に「ブルーズ」が与えられた(これはつまり、乗組員となる選手が決定されたという意味だ)。それから6週間、毎日新聞には彼らの名前が印刷されている。この6週間、毎朝彼らの体重も記載されている。ときには、その体重は24時間前から4分の1ポンドほど増えており、24時間以内に彼の体重は2分の1ポンドほど減少するかもしれない。イングランドはこの動向を追い続けているのだ。

さて、大学が代表選手を選出したときに、あるボートの中ほどのポジションの選手は14ストーン(1ストーン=14ポンド)もの体格の良い選手であると知らされるのは興味深いものであるといえる(少なくともボートかその大学に関心があるものにとっては)。しかし、ある朝には彼が14.1ストーンであり、またある朝には13.13ストーンであったという追加情報は、彼の姿をよりはっきりと思い浮かべる上に置いてはなんの役にも立たない。実際に、我々はある朝に14ストーンだった人物が、また別の朝には14.1ストーンであったということをすでに予想できているのだ。ボートの漕ぎ手にとって体重が重要であることは分かる。しかしそれは同様に、ラグビーのフォワードにとっても重要なはずだ。そして新聞読者はボートと同じくらいサッカーにも関心を持っている。しかしイングランドのラグビーチームのメンバーが選出されたときに、我々は彼らの体重のチャートを見ることはない。実際に、我々はその選手たちの体重についてはまったく知らされていない。あるいは試合毎の選手たちの名前が毎日毎日報道されることもないのだ。

この大学ボートレース大会の体重に関する記事こそ、「習慣」によるものなのだ。「なんてこった! トムキンスのやつ、昨日は12.6と2分の1ストーンだったくせに、今

日は12.7ストーンになってるじゃないか。これは大変なニュースだ。読者に知らせなければ！」などと本気で考えている記者などいないのだ。あるいは一方で、「これらの選手たちの名前を記載しはじめて今日で28日目だ。もし関心ある人が彼らの名を見ているのなら、今頃は暗記してしまっていることだろう。そしてどのみち、明日も同じ名前を見ることができるだろう。だとしたら今日のところはその分のスペースを、安全ピンを飲み込んでしまった赤ん坊の記事か、ペルーへの新たな使節がジェノバに到着した記事を書けるのはどうだろうか」とその記者は考えないだろうか。しかしその記者はそのようなことは考えない。なぜなら彼はそのことに対して一切の意識的思考をしていないからなのだ。彼は自動的に習慣を受け入れている。あらゆるポート選手への言及の次には、名前と体重が併記されるものだという習慣を疑うことなく。

政治家たちは同じ習慣に従って、「国際的な行き詰まり」の次には「戦争」があるものだと思込んでいる。「戦争」とはかつては弓と矢によって1千人をわきへ追いやるものだったが、現在は爆弾と毒ガスで1千万の人々をわきへおいやっているという事実は、彼らにとっては何のメッセージ性も持たない。彼は戦争の実態を思い浮かべることができないのだ。彼は国際的な政治をただ習慣にのっとっておこなっているだけなのだ。コンサルタントが顧客に長い船旅に出るように指示するとき、彼はその長い船旅を思い浮かべることができない。あるいは彼は、その受難者が長い船旅をするほどの経済的余裕があるかどうかについて、知りもしないし気にもしないのだ。彼がしているのは、彼が調べている体のある状態への自動的な反射作用に従うことだけなのだ。これこれの状態に対して、彼は「長い船旅」と言っているだけなのだ。これと同じやり方で、政治家のある状態への自動的な反射作用が「戦争」と言っているのだ。そしてそれは、そのある状態を終わらせるための習慣として受け継がれてきたやり方なのだ。

それゆえ、私がもし彼ら自身がその最初の犠牲者になるとしたら彼らは「戦争」とは言わないだろうと主張するとき、私は彼らの勇気や自己犠牲への欲求を疑っているわけではない。私は彼らの想像力を疑っているのだ。ほとんどの人の想像力の中では、自身の死と他者の死の間に横たわる湾に橋をかけることは不可能だ。一般的な人にもわかるように、次のような死の比較表を作ることができる。

飢饉による1千万人の中国人の死

= (恐れおののいて) 10万人のシシリーの地震での死

= (恐れおののいて) ブライトンでのインフルエンザによる1千人の死

= (恐れおののいて) チフスによる自分の村の10人の

死

= (恐れおののいて) 1人の友人の突然の死

1千人の友人の突然の死 = (恐れおののいて) 自分自身の死

このような表のあり方が真実に近いと仮定して、もし戦争が他者ではなく自身の死として認識されるのであれば、平和への道がどれほど希望に満ちたものであるかが分かるだろう。実際のところ、政治家たちは戦争を死と関連した観点ではほとんど考えていないのだ。確かに、戦争を戦うことは人を殺すことだ。本を読むことが確実にページをめくることであるのと同じだ。しかし本を読むことを指先のトレーニングと考える人はいないのだ。もし戦争を生み出すものが、戦争を確実に自身が死ぬものであると考えたのなら、そのときには、彼は戦争が確実に1千万の人々を殺すものだと考えることができたのかもしれない。

というのも現時点では、彼の1千万人に対する態度というのは、皮肉と感傷が入り混じっている。ビバリー・ニコル氏の『警告を告げよ』には「スカンク対ベンガル騎兵」と題された章があるのだが、そこでは「戦争の知識人」(イエイツ・ブラウン)と「平和の知識人」(ロバート・マネル)の間で行われた実際の対話が記録されている。その戦争の知識人が尋ねたことはこのようなものだ。

「なぜあなたは人々が命を失わないことがそれほど重要だとお考えなので? …人はいつか死ぬではないですか。他の方法と同じように、なぜ銃弾に倒れて死ぬことは許されないというのですか?」そしてそれから、必然的に、しかし知性はほとんど感じさせない形で、彼は続ける——「実際に、銃弾に倒れることは、ガンや心臓の脂肪変性で死ぬのと同じじゃないですか。」

戦争での死が必ずしも前線でライフルの銃弾によってのみもたらされるものではないということを、再度指摘する必要はないだろう。それは平和な時代の死因がガンだけではないのと同じことだ。しかし仮にこの戦争の知識人が、どうしてこれほど多くの人々が死を深刻に考えるのかを知りたいのならば、私が教えてあげよう。

理由はこうだ。死はおしまいだ。ひとがこういうとき、それはすべてを物語っている。死とは起こりうる中でもっとも最悪なできごとだ。というのもそれは、起こりうることの中で最後の最後に起きることだからだ。どんな悲惨なことが起きようとも、願いさえすれば、人は死の代わりとなる選択肢を持っているものだ。しかし死が訪れたときには、彼はそれを他の災難に代えることはできない。他者にどんな仕打ちをしたとしても、その人物の命さえ救ってやれば、その人物に生と死の選択肢を与えてやることのできる。しかし命を奪うのなら、少なくともこの世界には、何

も残してやることはないのだ。

先ほどの誇り高き「戦争の知識人」は腹を立ててこれを否定するかもしれない。彼は自身の息子が詐欺で捕まるくらいなら、息子が死ぬところをみたいと述べる。しかし私は彼にまずこのことを思い出させたい。詐欺による逮捕は「訪れる災難」ではなく、自ら周到に招くものだと。そして第二に、それは彼が望んで決めるものではなく、彼の息子が決めることだと。あらゆる手段を講じて、誇り高き「戦争の知識人」に死を招き、死を受け入れ、そして死の腕に包まれて美しく死なせてやろう。しかし彼にはいかにしても人に死を招く権利はないのだ。もし死が鼻かぜやタピオカプリンと同じくらい大したことではないとしても、人に鼻かぜやタピオカプリンを強要する権利はないと私は強く感じるのだ。

実際の戦争での死について（彼らが好む言い方をするなら「銃弾に倒れる」だが）、我らが軍国主義者はかわいらしいほどに頑固だ。しかし彼らに消滅することの本当の恐怖について聞いてみるといい。国境での争いは不可避で、その争いは戦争によって解決されなければならないという彼の主張の中で、彼はこのように言う。

「君が、私が話しに聞いたことのあるハンガリー人だったとしよう。彼の私有地にはルーマニアの国境が通っていた。彼の家はハンガリー側にあったが、彼の先祖の墓はルーマニア側にあった。いちいち他国の歩哨に許可を得なければ自分の母親の墓に花を供えられないとしたら、君はどう思うかね？」

人の心がこのように働くなどことは思いもよらないことだ。先の戦争の結果、100万人の妻と母親が、他国へいかなければ彼女たちの息子の墓に花を供えられなかった。軍国主義者たちは彼女たちがどう思うと考えるのだろうか。「もう一度戦争をしよう」だろうか。国境をまたがずに花を供えることがそれほど絶望的に重要であるというのなら（死そのものは重要ではないくせに）、明らかに戦争こそがその避けるべき形での死を生み出すものだ。というのも、それぞれの国が国境をまたいで戦わない限り、50パーセントの死者は他国の土の上で死ぬことになるからだ。

あわやトルコとの戦争が生じかけた1922年、

「パンチ」誌は国に対して高尚で愛国的なアピールをした。「ガリポリにある我らの墓の神聖性を守れ」と。これはガリポリにある墓を守るために、より多くの物資を提供することを求めるものだった。明らかに、感傷的な軍国主義者にとって、神聖化されるのは死者の墓ばかりなのだ。そして命そのものは神聖視されないのだ。

3

本当に神聖な生というものがどういうものかを感傷的な

軍国主義者たちと愛国的な政治家にわからせるために、もう1つの仮定の話をしたい。愛国主義者はしばしばポーランド回廊が脅かされたら、それに対して武力を持って立ち向かうのが英国の使命だと主張する。では仮にポーランド回廊が脅かされたとして、また仮に彼が明日か明後日にでも死の苦しみを享受することを認めれば、ポーランド回廊の安全が守られるとしたら、彼は同意するだろうか？

彼がしうる答えは以下の3通りのいずれかだ。

1. もちろんだ。（死は重要ではない）

これを心からいうのであれば、私は彼を称賛し、ひたすら頭を下げるばかりだ。

2. もちろん否だ。

この言葉によってイングランドを戦争に駆り立てるのなら、彼は数千ものイングランド人を、自身が拒否するところの死へと急ぎ立てることとなる。

3. それはフェアな質問ではない。

何度この返事を聞いてきたことだろう！

そしてそれはどういう意味なのだろうか？ つまり、彼は自分自身の死と同じ価値のある重要なものとして、戦争を考えたことがないのだ。彼はいかなる機会も進んで受け入れると述べるかもしれない。瞬時の死、長く苦しむ死、または安全のいかなる機会も。そしてまた、これ以上のことは他の誰にも頼まないともいうかもしれない。いかなる個人にも、と。しかし確実に彼は数千もの死の苦しみを求めるし、彼が前もってその犠牲者たちの名前を挙げられないという事実は、彼の責任を多少なりとも減らしているようには見えない。私の聞きたいことは単純で、公平なものだ。彼はポーランド回廊を守るために数千の命の犠牲を求めている。今ここで、彼は自分自身の命を犠牲にはできるのだろうか？

果たして、彼がそんなことをするだろうか？

私には彼がそんなことを考えたことがあるようには思えないのだ。愛国主義者にとって、ポーランド回廊とは「戦争を行うべき口実」でしかないのだ。これまでそうであったように。

もし愛国主義者たちが犠牲になるのであれば、戦争は二度と起こらないだろうという私の確信を、いったいどれくらいの方が理解と共感してくれるだろうか。

10章 「あまりにも平和主義的でなければいけない」（“Not too pacifist, I hope”）

1

前章を書き終え、本章を書き始めるまでの間に、私はある若い女性とゴルフをしていた。そして11番ホールティーショットの際に、しばらく待ち時間が発生した。我々が座って待っている際、女性は景色を称賛しながら、

次のように言った——

「近頃はとてもお忙しいんじゃないですか？」

「ええ、とても」私は答えた。

「今度は何を書いてらっしゃるの？ 舞台脚本？」

「いいえ、本ですよ」

「あら、小説かしら？」

「ああ、いえ…戦争に関する本なんです」

しばらく沈黙があって、彼女は言った。

「それはつまり、戦争に反対する？」

「そうです」

「あまりにも平和主義的でなければいいけれど」彼女は微笑んだ。

昨年の休戦記念日の3日後⁽⁵⁾、『モーニング・ポスト』にある女性からの手紙が掲載された。そこでは次のように述べられていた。

「私は彼 [ラドヤード・キップリング氏]⁽⁶⁾ が、女性が戦争に関して武装しないことや不準備なことへ大変な叱責をしているのに気づきました。ですが叱責されるべきは、何年もの間、先頭に立って猛烈な平和的プロパガンダの舵を取ってきた著名な男性たちに向けられるべきではないでしょうか。」

明らかにここで言われる「先頭に立って猛烈な平和的プロパガンダの舵を取ってきた」とは、先の女性の「あまりにも平和主義的」という言葉と同じ意味である。

人は平和を愛するものを自称してもいいのだが、それを愛しすぎることに注意せねばならないのだ。

一日一日が過ぎて行く中、この本を書きながら私は日に日に確信しているのだが、「戦争」や「平和」を語るとき、我々は価値が完全に変わってしまった言葉について考えることになるのだ。「平和」という言葉は未だに多くの人にとっては堅苦しく臆病であることを意味する。一方で「戦争」は勇ましく、自己犠牲的であることを意味するのだ。そしてもし「あまりにも平和主義的」であるならば、それは心の底からは国を愛していないものであり、「自分だけなんとか助かろうとする」ことばかり考えているものとみなされるのだ。そしてサッカーの試合をひどく乱暴だと考えるほどに臆病者と思われるのだ。

しかし興味深いことに、戦争について勇ましくも雄弁に語るものの中に、戦争で死んだものは一人もいない。国家のための喜ばしき死について語るのは、実際に死んだものではなく、その気になれば死ぬことができたのにそうしなかったものたちなのだ。そのことについて雄弁に語るものうち、90%は望めば軍服を着ることができたのに、戦争に直面しようとしなかったものたちなのだ。そして残りの10%は（実際に10%もいるのかは不明だが）戦争を生き抜

いたものたちなのだ。経験したことのないことに対して勇敢で勇ましく、ただけしくあること。すでに過ぎてしまったことに対して勇敢であること。これは平和主義者が勝ち取ることを望んでいる、勇気を示すしるしではないのだ。オクスフォードの若者が二度と「王と国」のために戦わないことを決意したとき、政府のある名高い人物が、彼なりの慈悲深いやり方で、彼のことを「黄色い腹をしたやつ」(yellow-bellied, 臆病者の意)と呼んだ。彼が自身の提議に対して異を唱えるものを「赤い腹」(red-bellied) (あるいは彼と同じく「青い腹」(blue-bellied) かもしれない)と考えているのかどうかは公にされていない。しかしもし彼がしばらく考えるだけの時間があつたならば、あるいは合わせて考える何かをもっていただければ、それが明日を生きることを望む若者たちの習慣に適していないことに気づけたことだろう。そしてこれから数年のうちに実際のものとなるかもしれないしならないかもしれないこの危機の観点では、勇敢でも臆病者でもありえないのだ。

平和主義者が必ずしも臆病者ではなく、軍国主義者が必ずしも勇敢ではないということに我々は同意してよいと思われる。さらにいえば、戦争が必ずしも男らしいもので、平和が女々しいわけではないと、あえて主張しなければならないだろうか？

くだんの若い愛国主義者の女性と、今一度彼女の土俵で、あるいはかつて彼女たちがかつて土俵とした場所で、会ってみることにしようじゃないか。すなわち、家庭と呼ばれる場所で、である。

すべての家政婦が「権利」を持っており、すべての若い既婚女性たちも「権利」を持っている。そして時によって、彼らが自身の権利と考えてきたものは一致しない。こう仮定しよう。ある家政婦とある女主人の権利が（例えば、日曜に温かい夕食を出すかどうかで）衝突したときには、戦争が避けがたく生じることになる。皿や金属製の食器が、はじめは控えめに、しかしすぐに激しく飛び交うことになる。家政婦は家から飛び出し、そして男性の親類を連れて戻ってくる。女主人は書斎から彼女の亭主を引きずり出し、そして兄弟たちに応援要請の電話をかける。こうして戦いは男たちにゆだねられることになるのだ。こうして家じゅうで激しい争いが行われ、協定によって使用できる武器はこぶしと棒と瀬戸物に限られることになる…。そして夕方には、平穏が取り戻されるかあるいはそう命じられるかするのだ。家政婦が勝利し、日曜どころか平日さえも今度一切温かい夕食が提供されないことが決まる。あるいは女主人が勝利し、今後家政婦が夜に外出することは一切許されず、すべての損害賠償を支払うことが決められる。それではもし女主人の亭主が、こんな家はもうまっぴらごめんだと異を唱えたとしたら、誰が彼のことを男らしくない

やつだといえるだろうか。このできごとをまったくもって間違った、まったくもってばかげたものだと考えることは、男らしくないことなのだろうか。今私が知っているのは、現在私たちが暮らしているような、警察と法廷があって、この緊急事態を調停してくれる秩序ある社会でのことではない。私がいいたいのは、警察を欠いたコミュニティにあったとして、まともな感性をした、想像力のある、知的な人間であればこのような状況で生きることが耐えられないと思うだろうということなのだ。何かをより尊厳のあるものに変えてゆくことは、人間の力を越えた行為であるはずがないということなのだ。そして力を合わせてその尊厳を追い求めるよう周りのものを説得するのが彼の義務だということなのだ。もしこう考えたとして、傘で頭を叩きつけられることから逃れた女々しい生物として家から追い出されることなどほとんどありえないことなのだ。

先の戦争では、1千万の人々が殺された。そして少なくとも1千万の人々が肉体的、精神的に何らかの影響を受けた。もし男らしい愛国主義者がますます男らしい感性によってこの事実を理解するならば、彼には次のことも覚えておいてもらいたい。これがすべての犠牲ではないということ。仮に先の戦争で一人の犠牲者も出ていなかったとしても、まともな感性をした、知的な人間にとってはその再発は耐え難いものなのだ。もし国家が国民から70億ポンドを巻き上げ、300万の国民を数年の間通常の業務から離れさせたとしたら、完全なる破壊よりは時間、金、人を使うもっと価値のある手段があるはずだと（まったく男らしさを損なうことなく）考えることは可能なのだ。その時間と金の支出から16年も経っているのだから、その国は幸福や尊厳や美観の面で、損失より多くの利益を得ているべきだったと感じることは可能なのだ。

2

平和とは戦争からの自由を意味するものであり、苦悩からの自由ではない。賃金を稼ぐために朝の6時に起きるのは平和の一形態だ。1マイル地中にある石炭をたたき割るのは平和の一形態だ。エベレストを上るのも、フットボールで鎖骨を骨折するのも、大西洋を一人で渡り切るのも、チフスの感染爆発と戦うのも、オーストラリアまで飛行するのも、10万字の本を書いてそれを破り捨ててもう一度書き直すのも…すべては平和の一形態なのだ。近頃の愛国主義者たちが自分を満足させるときに用いたがる例のラテン語の引用句⁽⁷⁾が書かれた時代には、世界中の大変な仕事は生きている奴隷が果たしていたし、娯楽は死にゆく奴隷によって提供されていた。平和な探検など不可能であったし、山や海は遊び場とは思われていなかった。そのため若きローマ人がまずエキサイティングなイベントとして、そ

して最後には自身の強さや技術や勇気を見せる場所として戦争を喜んで受け入れていたとしても何ら不思議ではない。

現代の英国人は、ピカデリー・サーカスの通りを横切ることで勇気などいくらでも示すことができる。グランド・ナショナル（障害物レース）で競走馬に乗ることもできるし、飛行機にも乗れる。ブルックランドのサーキットで競い合うこともできるし、ブライトン・ピア桟橋から海に飛び込むこともできる。ピーターセンに喧嘩を挑むこともできるし、ラーウッドにボウリングで対抗することもできれば、輸血学会に参加することもできるのだ。つまるところ、英国男性が男らしさを示すために、あるいは英国女性が間接的にその偉大で英雄的な感覚を経験できるために、4年間も戦争という耐え難い迷惑行為がヨーロッパ中に広がる理由など何一つないのだ。

私は戦争を耐え難い迷惑行為と呼んできた。100万の人々を死に追いやったあの戦争屋たちが、自分自身の死と直面するつもりはさらさらしない人々であるということに気づくのは、驚くべきではほとんどないが、興味深いことであるといえる。さらに彼らにとって、戦争は自分たちの日常生活の中断でさえないのだ。誰に戦争の責任があるのだろうか？明らかにそれは詩人ではないし画家でもない。肉屋でもパン屋でも、農家でも医者でも、キャンドル職人でもないのだ。どれほど我々が賞賛を分け合ったとしても、その責任があるのは政治家や軍の上層部の人間、投資家、軍需品会社の重役、新聞会社の所有者、編集長、論説委員なのである。そして戦争が勃発したときに何が起きるだろうか？これらの人々は、以前の生活を以前にも増して熱心に行うことになるのだ。ただのひとりさえ、国からの召集によって仕事が妨げられることはないのだ。事実、彼らのうちのほとんど全員にとって、戦争の勃発とはまさに偉大なる名声や自己表現、そして大いなる報酬の機会となるのだ。前の章で、私はもし彼らの全員が戦争の宣言と同時に処刑されるのなら、戦争は二度と繰り返されることはないだろうと述べた。しかし私は、安全が保障された上で地味な衛生部隊の任務に就くというだけでも、彼らにとっては十分に効果があるように思えてきた。

そのため、もし男らしい愛国主義者がまだ、戦争の暴力的憎悪が臆病さや女々しさ由来するものと考えているのなら、彼には戦争が4年間の生活の中断（それも衛生部隊で）であり、1日700万ポンドの浪費が4年間続くのだと知らせてやればいいのか。そうすれば彼は戦争を憎悪するよりふさわしい理由として何かあるのかを考え始めることだろう。だから彼には戦争について、以下の観点で考えさせるといいのだ。すなわち不当利得者、徴兵逃れ、縁故びいき、経歴詐称、戦時日誌、プロパガンダ、噂、スパイ、

受勲者名簿、役職任命、愛国唱歌、「一斉検拳」、白い羽運動、通常通りの仕事、通常通りの生活を守ること、憎悪と悪意と無慈悲、うそ、うそ、うそに次ぐうそ、そして世界のあらゆるボトムリーやクリューゲル、スタヴィスキたちの神格化。それが現代の戦争なのだ。1千万の戦死者については忘れてしまえ。我々は「我々が勇敢なるものたち」について、勇ましく心から語り合うことができるのだ——国のために死すことは甘美にして望ましいもの。しかしそこには10万の手足を失った女性たちと、10万の飢えた子どもたちを加えるのだ…そしてこう考えよ。これはただの始まりに過ぎないと。これはただ比較的短かめの「4年戦争」に過ぎないのだ。まだ男らしさを試すための来るべき16年もの戦後が待ち受けているのだ。つまり、崩壊した課税制度、我々が二度と得ることができない自由への足かせ、希望などというものはとうに死に絶えてしまった100万もの失業者たち、希望など生まれえない青年世代、そして先の絶望的戦争で争われた無政府主義と独裁制…

しばらく沈黙があって、彼女は言った。

「それはつまり、戦争に反対する？」

「そうです」

「あまりにも平和主義的でなければいいけれど」彼女は微笑んだ。

11章 人間の本質 (Human Nature)⁽⁸⁾

1

軍国主義者は次のようにいうことに慣れている。すなわち、「人間の本質がそのようなものである限りは」我々は戦争を廃絶することができず、「我々がみな聖人となったときのみ」、友好的な合意によって我々の違いを埋められる希望があるのだと。

我々は聖人になる必要はない。我々はただ、犯罪的な狂人であることを止めればいいのだ。

35年前、キッチェナー卿⁽⁹⁾はオムドゥルマンでの勝利の後にナイル川を進みながら、ファシヨダと呼ばれる村にたどり着いた。そこで彼はマルシャンという名のフランス人の少佐と出会った。彼はファシヨダを彼の祖国の名で所有することになっていると宣言した。そのニュースはヨーロッパ中に知らされた。政治家と時事評論家、そして編集者たちは作業に取り掛かった。そして少しの間、彼らは英国とフランスの間に大規模な戦争を手配するのに成功しているように思われた。

しかしながら、戦争は起きなかった。

もしかすると政治家たちでさえ、戦争という発想が滑稽に思えたのかもしれない。あるいは、いずれにせよファシヨダなんて4千マイルも離れたアフリカの沼地の真ん中

にある灼熱の村でしかないのに、フランスの船乗り（それもファシヨダなんてそれまで聞いたこともなかった）たちが北海へと歩みを急ぎ、そしてやはりそれまでファシヨダなんて聞いたこともなかった英国の船員が乗っていると思しき見えもしない軍艦に向かって81トン砲を発射しているという、そんな考えに思わず笑ってしまったのかもしれない。しかし現実主義者の国と商売人の国との間で、蚊が舞う沼地を勝ち取るための戦争が始まってしまったとして、結局のところそれが人間の本質なのだというのは真実だろうか。

しかし人間の本質とはこのように現れるものではないのだ。もしキッチェナー卿が蚊と同じ程度にその少佐にいらついで、怒り狂ってマルシャンの顎を殴っていたとしたならば、あるいはマルシャンが奮起してキッチェナーに決闘を申し込んでいたならば、英国の兵士たちが制御不能となり、さらにより強力な兵力があって、フランス軍を村から放り出していたとしたら、そのような事情であれば、人というものはとりわけ灼熱の環境においては衝動を制御するのが難しく、そして結局のところ兵士というものは聖者たりえないのだという理由で、彼らは許されるのかもしれない。しかしそのようなことは起きなかったのだ。暑い気候においては不自然というわけではないのだが、キッチェナーとマルシャンはともに酒を飲み交わしたのだ。そして4千マイル離れたところで、彼らの首相たちはそれぞれに、彼らが聞いたこともなかったような沼地を奪い取られたという考えで、そのような制御不能の動乱によって大騒動が起きており、そして一流のヨーロッパ戦争のみが彼らの本質が求めるところの安堵をもたらすだろう、というふりができるかどうか考えあぐねていた。そして彼らはそれに反対し、結果その戦争は1914年に生まれたヨーロッパ最大にして偉大なるあの冗談⁽¹⁰⁾まで延期されたのだ。

ここで老政治家が、私が知っていることは全部でたらめだと述べるために話を遮る。（彼が言うには）戦争が個人の感情の本質的な表れだなどという言説は行われていない。そうではなく、戦争とは国家の感情の本質的な表れなのだ。それはまるっきり、個々の人が他の手段ではなしえないときに、武力によってその目的物を手に入れるのがその本質であるのと同様に、国家が最後の手段としてその目的物を手に入れるために武力を行うのもまた本質なのだ。

このように考えてみよう。

ある行為が本質的であるというときに、恐らく我々は人間の本質と関わる問題として語っているのだ。しかしいくつかの理由のために、我々はいつも人間の本質というものを動物としての最も低次元の本能と関連付けてとらえている。優しくなく、残酷であるということは、「人間だけの本質」なのだ。怒り狂うのは人間の本質で、許すことは人

間の本質ではないのだ。「パンチ」誌の読者であれば、こんなジョークを覚えているだろう。からかってくる小さな女の子を噛んだ犬の所有者が、憤慨したその母親に対して申し訳なさにこのように言っているものだ。「結局のところ、犬もただの人間ってことですね」。つまり「人間である」ということは明らかに、我々が魂や知性を持っているのを忘れることなのだ。我々が不滅への願いを持っているのを忘れることなのだ。そして我々が猿から退化した生き物であることだけを覚えているのだ。

大変結構。しばらくこのままにしておこう。我々は動物なのだ。しかし仮にそうだったとして、「戦争の本質」が自然の摂理に則っているといえるのだろうか。

ネズミがチーズを欲しいと考えたとして、ネズミの本質に従って、チーズの所有についてあれこれ頭を悩ますことなく、チーズが見つかったらたちどころに食らいつくことだろう。しかしいったんネズミ捕りの本質に気づいてからは、チーズを追いかけてネズミ捕りに突入するようなことをするだろうか。

あるいは猫がすばやくある場所から他の場所へと行きたいと思ったとして、猫の本質に従って、そこが誰かの所有する場所で通行できないことなどお構いなしに、猫は可能な限り素早く移動を行うことだろう。しかし道中に水たまりがあったら、水たまりに突進することはしないだろう。そして行き先に犬がいたら、猫はそこに近寄りもしないだろう。

言い換えれば、彼らの本能や知性がそう導く限りにおいて、行動における損得勘定を行うのは、動物の本質の一部なのだ。そして私が証明を試みてきたように、戦争を生み出すものたちというのは、戦争の損得勘定を行わないのだ。老政治家に譲歩して（実際にはまったく譲歩などしないのだが）、ある行動が個々の構成する人々にとっては本質的ではないものであっても、共同体にとっては本質的だということがあると認めることにしよう。あるいはファッションを所有することは、英国とフランス、両国にとっての大きな国益であると認めるとしよう。仮にそうだとすると、戦争というでたらめなほどに釣り合わない危険を伴ってまでその所有を求めることは、我々が知るところの、つまり人間の本質と動物の本質のどちらにとっても、矛盾が残るといわざるをえないのだ。

2

しかし実際のところは老政治家の言うことなどこのように真剣に取り合う理由はないのだ。というのも、何度も何度も彼自身が、戦争というものが本質に背く不自然な伝統であるということを証明してきたからなのだ。私がこれを書いているさなかにも、彼の方から私の考えの助けとなる

行動を起こしてくれた。

「タイムズ」紙の論説に見られる彼の声に着目してみよう。

ついに、文明国家が空爆へと戦争手段の領域を広げるという野蛮行為にまで身を落とさなければならないということへの不信感が広まっている。空爆は大砲による攻撃と同じようなものだという議論も時として行われている。しかし物質的にも道徳的にも、空爆ははるかに許されえない行為である。空爆では見境なく破壊が行われ、爆撃が始まれば女性や子どもたち、そしてこれまで築かれてきた文明の富が、殺害と破壊に巻き込まれることになるのだ。ある国家が敵国の首都を上空から破壊することが正当な戦争の手段であると、そして攻撃を受けた国家が攻撃した国の首都やそこに暮らす人々を高性能爆薬や有毒ガス、細菌爆弾で破壊するのを正当な戦争の手續きとして認めることは、文明性の破滅であるといえる。⁽¹¹⁾

言い換えるところということだ。

「戦争とは見境がないものだけど、見境がなさすぎてもいけない。都市を破壊する行為だが、首都は攻撃してはいけない。スカーボローの女性や子どもは殺しても、ロンドンの女性や子どもはだめだ。ちなみにそこには編集者たちも暮らしている。空爆とは地面からの爆撃より『物質的にも道徳的にも』『はるかに』許されない行為だ。つまり、道徳的に許されないというのは、物質的に許されないからなのだ。そこで、戦争のルールを修正しようじゃないか。」ここからは「戦争のルール」に関する事実を読み取ることができる。

- (a) 戦争の指揮は全ヨーロッパ諸国によって同意されたルールに従って行われる。
- (b) 戦争での勝利を確信している国は、不都合であるルールについては無視することは明らかだ。
- (c) さきにルールを破った敵国を非難することになるのは同様に明らかだ。
- (d) 敵国は仮に今破っていないにしても、今頃はそのルールを破ろうとやっきになっているに違いない。
- (e) 先の戦争までガス兵器は禁止されていたが、ドイツはそれまでに自分たちが毒ガスにやられていたと主張しながら毒ガス兵器を使った。
- (f) その他のあらゆる国家が毒ガスを使った。
- (g) もし空爆で首都を爆撃してはならないという法律ができたところで、そうしたほうが都合よく、かつ安全だと気付いた最初の国によって、その禁止項目は無視されるだろう。

(h) そしてすべての武装国家がそれを破ることになるだろう。

そしてさらに以下が追記されるかもしれない。

(i) そのような爆撃は数千、数百万もの死を、それも女や子供といった無防備の人々にもたらされることになるだろう。

(j) もしこれが文明の終わりとなるのであれば、どの崩壊した国に責任があるかなどどうでもよいことだ。

以上に述べたことは誰もが知る常識である。では平和を愛するものの反応はどのようなものだろう。

例えば彼はこのように述べる。

「私はずっと戦争は間違っていると考えてきました。もしみんながそう考えたのなら、戦争はとっくに廃止されていることでしょう。つまり残念なことに、私の考えに賛同されない方が大勢いるのです。ですが彼らは身近な女性や子どもたちの無差別な苦しみには耐えることはできないことでしょう。彼らに戦争とは避けがたくも何を意味するのかを理解させることができさえすれば、少なくとも彼らは私と同様の戦争への憎悪を共有し、我々の間に平和を築くことができるのです。」

すると老政治家の反応はどうだろうか。

こう考えているように見える。

「女性と子どもたちの無差別な殺害は恐ろしいことだ。私が若かったころにはそのいずれも起きなかった。戦争についてまったくもって間違った印象を与えているように思えるがな。こんな考えが出回ってしまったら、市民たちがこれ以上の戦争を耐えることを拒んでしまうかもしれない。」

そして彼は何というだろうか。彼は市民たちがこれ以上の戦争を耐えることを拒むのが喜ばしいことだと表明するだろうか。いったん戦争が始まったら国というものはそれに勝つために手段を選ばないという、よく知られた、十分に証明されてきた事実をその心に押し込むことによって、市民たちがその決断を下すのを助けるだろうか。その結果として、戦争は無防備な多くの人々の死を意味するに違いないのだと彼らに告げるだろうか。

否だ。

彼は恐らくこのように述べるのだ。

「老政治家たちの無差別な殺害もまた恐ろしいことだ。そして我々の事務所や行きつけのクラブの破壊もまたそうだ。戦争というものがそれらの破壊をも意味するのであれば、それは直ちに廃止されなければならないだろう。しかし、戦争というものは思われているほど、そんなにひどいものなのだろうか。空爆を廃止する一方で、物理的にも道徳的にもはるかにましであった旧来の戦争を保ち続けることで協定を結ぶことはできないのだろうか。そうすれば政

治家たちが従来の戦争で国を混乱に陥れても、その愚かさや残酷さについての平和主義者たちからのばかげた感情的な非難は受けなくて済むだろう。そうすれば殺されるのは兵士たちだけであるし、これまで何度も彼らに伝えてきたように、国のために死すことは甘美にして望ましいものなのだ。」

これはあくまで、老政治家が言いそうなことを想像したに過ぎない。しかしそれは、戦争の本質性と不可避性の論拠となっていたものをことごとく破綻させている。というのも仮にドイツが大砲によってパリを砲撃して勝利と呼ばれるものを勝ち取ろうとするのが「本質的」な行為であるのなら、どうしてフランスが、敗北と呼ばれるものを回避するために、ゆいいつできる手段…つまり空爆で、ドイツへと報復したからといって、それが「本質的ではない」といえるのだろうか。人間の本質とは、まったく別のやり方で機能するものだ。4千マイルも離れた、誰も名前を知らなかったような灼熱の沼地を必要だと考え、戦争について入念な熟考を行った上でそのために戦うなどというのは、まったくもって人間の本質に該当しない行為なのだ。しかしいったん戦争が始まってしまうと、その目的は政治という正体不明の怪物キメラのためではなく、彼らがよく知り、愛し、理解している彼らの祖国を守るためという神聖さ（と彼らはそう捉える）に目的がすり替わるのだ。そして死者が出たときに、彼らの感情、獐猛なまでの強情と、敗北への憤りが高ぶることになるのだ。そしてそうなれば、彼らが勝利のための手段をつかみ取ろうとすることは、例え数年前に穏やかな学術会議の中で、老政治家たちが条件付きでそのようなことはすることはないだろうと約束したとしても、まったくもって本質的なことなのだ。つまり、人間の本質というものはそういうものであり、人間はあくまで人間であり、聖人とはなりえないのだ。

3⁽¹²⁾

先の「タイムズ」紙からの引用は、戦争の習慣だけでなく、政治家や愛国主義者、聖職者たちがいかに習慣的にそれを受け入れてきたのかを明らかにしてくれる。

文明国家が空爆へと戦争手段の領域を広げるといふ野蛮行為にまで身を落とさなければならないということへの不信感が広まっている。

「戦争手段の領域を広げるといふ野蛮行為」とは無邪気すぎてほとんど息をのむほどの。空爆を行うというのは、戦争というものの野蛮さにおいては目を見張るほどの特徴ではないのだ。野蛮な民族たちは支払うべきその代償の大きさを知っており、むしろそれは文明国家における戦争のまったくもって目を見張るほどの特徴だといえる。現在までに野蛮な民族は我々のレベルにまで身を落とすことはな

かったし、仮にそうなったとしても、その責任は文明国家が負うべきものなのだ。

空爆は大砲による攻撃と同じようなものだという議論も時として行われている。しかし物質的にも道徳的にも、空爆ははるかに許されえない行為である。

しかしもし本当に空爆ははるかに許されえない行為であるのならば（そしてもし、よくあることだが、「タイムズ」紙が英国の効果的な声を持って語っているのなら）、なぜ英国はその許されえない犯罪行為を止めようとししないのだろうか。他国も同じことをしているからといって、ある計り知れない不道徳な行いが、どうやったら品位を下げえないというのだろうか。あるいは同じ理由で、どうしてある国の名誉とより調和するということのだろうか。あらゆる手段を講じて、その計り知れない不道徳の放棄を共有するよう、英国から他国に訴えかけさせようじゃないか。それこそが良き伝道者としての役割なのだ。しかし伝道者は彼らの道義が異教徒の需要に依存することを許さないものだ。「すべての者に首狩りをやめさせよ、君がそうするなら私もそうしよう」というような言い方は彼らの慣例にはないのだ。

空爆では見境なく破壊が行われ、爆撃が始まれば女性や子どもたち、そしてこれまで築かれてきた文明の富が、殺害と破壊に巻き込まれることになるのだ。

しかしどうしてだめなのだろうか。それこそが戦争というものではないのか？ 征服されるものの征服する者の意志への完全なる降服が目的ではないというのならば、いったいなぜ国家同士で戦うというのだろうか。そしてそれが計画的な殺害と破壊行為によるのではないというのならば、どうやったら降服は得られるのだろうか。そして戦争というものに女性や子どもたちが巻き込まれないことがあったらどうか。先の戦争では、いったい何百万の女性と子どもが巻き込まれたらどうか。数ええぬ死者のことは抜きにしても、彼らに用意されていた人生のすべてを失った女性たち、生まれてきても人生に何も用意されていなかった子どもたちはどうなるのだろうか。

ある国家が敵国の首都を上空から破壊することが正当な戦争の手段であると、そして攻撃を受けた国家が攻撃した国の首都やそこに暮らす人々を高性能爆薬や有毒ガス、細菌爆弾で破壊するのを正当な戦争の手續きとして認めることは、文明性の破滅であるといえる。

我々が戦争のルールを作り始めたら、この戦闘はルールによって禁じられていて、この戦闘は制限されていないなどと言い始めたら、我々は戦争が単なるいさかきを取めるための同意された手段であることを認めることになる。「人間の本质」などという口実はもはや使うことはできないのだ。自然界の闘いとは、動物間の闘いとは、歯とツメ

によって死ぬまで行われる。戦争のモラルでは、すべてが禁じられている。しかしながらもし、空爆で首都を攻撃してはならないという協定が結ばれるのなら、そうさせよう。しかし空爆で何も攻撃しない、空で戦わない、一切戦わないということで協定を結ぶのも、同じくらい簡単なことなのだ。空爆を禁じる法律を作る方が、戦争全般を禁じる法律よりも効力があると論じられてきた。というのも、その法を破ったものは、すべての調印した国家から空爆をくろうことになるからだ。しかし（協定に反して）戦争を行った国が、その他のすべての国から直ちに爆撃されるということもありえるはずだ。さらに、その「すべての国」が空爆を禁じる協定を破ったと判断するのは（それは戦時下に起きるのだから）、戦争を行ってはならないという協定を（平和時に）破ったと判断するよりもずっと難しいはずだ。ヴォルフ電報局が報じたベルリンが爆撃されたという言葉によって、彼らはパリに爆弾を落とすだろうか。あるいはどちらとも言い難いということを証明する写真や証拠を求めるだろうか。ドイツが証拠を提示するのは簡単だ。フランス空軍のものを見せかけた飛行機を自ら飛ばして、自国の要所でもない人もいない町の一か所に爆弾を落とせばいいのだ。人のせいにしながら敵国の首都を空爆することができる、なんと安全な手段なのだろうか！…そして協定に加盟しているはずのすべての国々が、1914年のときと同様に、初めから戦争をするつもりだったら最終的に何が起きるだろうか？

文明性の破滅であるといえる。

この詐欺まがいの破滅は、この50年与えられ続けてきた証拠よりも、もっと多くの証拠を必要とするというのか！

4

S R (Sympathetic Reader, 共感を示す読者): ちょっと話をさげぎって申し訳ないんだけど、あなたはあまりに多くのことを証明しようとすすぎなんじゃないですか？

M (Milne): どのように？

S R: 前のほうの章で、あなたは戦争というものが完全に人間の神聖に反するものだとほめかしておられました。

M: その通りです。

S R: この章では、あなたは戦争というものが完全に人間の動物性に反するものだとおっしゃっておられます。

M: その通りです。

S R: そうならば、人間はその神か動物かの衝動に従わなければならないので、あなたはここで、戦争などというものはありませんよ。でも私たちはそうではないということを知っているのです、このように仮説を立てないといけなないので

す。人間というものは、互いに殺し合いをするために、その本質的衝動を計画的に征服するものなのだ、と。そんなものは…不自然です。

M：ちょっと待っていただきたい。

S R：私がいいたいのは、人間の本質とはどこかそういう側面があるということなのです。

この共感を示す読者がいうことは正しい。人間の本質とはそういう側面があるものなのだ。

1. 人間がその権力を楽しむというのは、人間の本質に一致する。そして戦争を指揮するときに、権力者はこの権力を最も高い次元で経験することになる。

2. 戦争の「輝かしい勲章」に魅了されるのは（バーケンヘッド卿が指摘するように）、人間の本質に一致する。そして輝かしい勲章とは権力者のために用意されるものなのだ。

3. 自分たちが直面するわけではない苦しみや恐怖に対して英雄的なほどに無関心であるというのは、人間の本質に一致する。権力者は戦争の苦しみや恐怖から注意深く安全な場所に隔離されているものなのだ。

さらにこれらも加えよう：

1. 一般の人間が習慣的な信条を受け入れることによって、自分自身が考えなくて済むようにするというのは、人間の本質に完全に一致する。

2. 一般の人間が何かより小さな悪からゆっくりとしかし容赦なく成長する悪を甘んじて受け入れるというのは、人間の本質に完全に一致する。

3. 一般の人間が自らを権力者に差し出し、特にその服従が彼らに本質的感傷をもたらすときに抵抗するというのを避けたがるというのは、人間の本質に完全に一致する。

戦争というのはこれらの本質的な力によって生じる、まったく本質を欠いた不自然な結果なのだ。

別の例を挙げよう。

馬力のある車の所有者が可能な限り早く車を走らせたいと願うことは本質的で自然なことだ。

知的労働者が仕事に夢中になって、仕事について考えながら家を出ることは本質的で自然なことだ。

その彼が反対側の舗道へ行きたいから道を横切るのは本質的で自然なことだ。

しかしその結果彼が自ら死に至るとしたらそれは本質的ではなく不自然な行為となる。

それを回避するために、我々は車の流れをコントロールし、あるいはその歩行者に声をかけて気づかせてやることができる。

戦争というものは、一般のものたちが現実目覚め、あ

るいは権力者が人間の本質と呼んでいるその動物的衝動をコントロールすることによって、回避できるものなのだ。

[訳注]

(1) 8章では戦争という重大な罪を認めるキリスト教への批判が行われている。

(2) 英国国教会はイギリス国王＝首長とする宗派であり、ここで国王が「信仰の守護者」と述べられているのはそのためである。

(3) 「千年王国」(the Millennium) とはキリスト教聖書「ヨハネの黙示録」20章において語られるもので、イエスによって統治された理想の世界を意味する。

(4) 序文において本書が1933年の7月から翌年の7月にかけて書かれたことが明かされている (v)。そのためここに引用された記事は1934年3月であることが分かる。

(5) 上記同様、執筆期間から1933年11月11日であることが分かる。

(6) 童話作家。戦争支持者として知られる。

(7) 本書で繰り返し引用されているホメロスの詩の一節「国のために死すことは甘美にして望ましいもの」のことである。

(8) 本章では“Nature”が重要なキーワードであり、原文では「自然」「本質」両方の意味で使われている。本稿では、原文との齟齬の出ないように配慮しつつ、“Nature”及びその派生語はすべて「本質」「本質的」と訳す。

(9) イギリス陸軍の軍人。“Briton Wants You”の募兵用ポスターで有名。

(10) 原文は“1914 Europe's Greatest Joke”である。第一次大戦のことを指している。

(11) 「タイムズ」紙1934年5月9日の記事からの引用。直後では、違反国への適切な制裁を行うことで世界各国における空爆の廃止を行うことが、世界規模の軍備縮小を行う唯一可能な手段であると示されている (15)。ミルンはこれに対し、空爆だけでなく戦争そのものをどうして制裁の対象にできないのかと疑問を呈している。

(12) 原文では2と節番号が振られているが誤植であり、正しくは第3節である。

引用文献一覧

Milne, A. A. “Armageddon.” *The Sunny Side*. London: Methuen, 1921.

—. *It's Too Late Now: The Autography of a writer*. London: Methuen, 1939.

—. *Peace with Honour*. London: Methuen, 1934.

—. “War with Honour”. Macmillan, 1940.

“The Arms Outlook.” *Times*. 9 May. 1934: 15.

吉村圭. 「A. A. ミルン『アルマゲドン』」『鹿児島女子短期大学紀要』51 (2016): 97-101.

——. 「A. A. ミルン『名誉ある戦争』」『鹿児島女子短期大学紀要』54 (2018): 139-151.

——. 「A. A. ミルン『名誉ある平和』〈1〉」『鹿児島女子短期大学紀要』56 (2019): 75-86.

——. 「第一次大戦のハリカチュアとしての『アルマゲドン』: A. A. ミルンが描いた大戦前夜」『比較文化研究』114 (2014): 281-294.

(2020年12月25日 受理)